



梅若研能会

十二月公演

写真：【梅】梅若万三郎 撮影：前島写真店

令和5年12月10日(日) 午後1時始(開場12時)
於 観世能楽堂 Kanze Noh Theater
GINZA SIX, B3F, 6-10-1, Ginza, Chuo-ku, Tokyo
Sunday 10 December 2023 Start 13:00 (door open 12:00)

二十五世観世左近記念 観世能楽堂



東京都中央区銀座6-10-1GINZA SIX 地下3階 TEL 03-6274-6579

- 銀座駅 東京メトロ銀座線・日比谷線・丸の内線 A3出口より徒歩2分
- 東銀座駅 東京メトロ日比谷線・都営浅草線 A1出口より徒歩3分
- 有楽町駅 JR山手線・京浜東北線、東京メトロ有楽町線 銀座出口より徒歩10分

入場料(全席指定)

指定席A 7,000円 指定席B 6,000円

※学生(要学生証)各席3,000円引き

お問い合わせ・お申し込み

e+(イープラス)

<https://eplus.jp/ath/word/69495>



カンフェティ TEL0120(240)540 (平日10:00-18:00)

<http://www.confetti-web.com/umeken>



公益財団法人 梅若研能会

〒151-0066 渋谷区西原1-4-2 TEL 03(3466)3041

(メールアドレス) staff@umewakakenohkai.com

(ホームページ) <http://www.umewakakenohkai.com>



YouTube 演目の見どころ解説動画を公開中!



フェイスブックはじめました! 公演情報更新中!



能「藤戸」「融」みどころ講座

11月23日(木・祝) 14:00~

於・梅若万三郎家能舞台(渋谷区西原1-4-2)

受講料 1,000円(※研究会入場券購入者は無料)

講師 加藤 眞悟(かとう しんご)

昭和33年神奈川県平塚市生まれ。昭和58年梅若万三郎家入門。三世梅若万三郎に師事。公益財団法人梅若研能会理事、日本能楽会会員(重要無形文化財総合認定保持者)、観世流準職分。昭和62年「小袖曾我」にて初シテ以降、主催会「明之會(めいのかい)」や横浜・平塚・田端・伊勢崎市・行田市等で能の普及に努めている。



講師 長谷川 晴彦(はせがわ はるひこ)

昭和44年静岡県掛川市生まれ、平成元年梅若万三郎家入門。三世梅若万三郎に師事。公益財団法人梅若研能会評議員、日本能楽会会員(重要無形文化財総合認定保持者)、観世流準職分。掛川市ふるさと親善大使。平成5年「小袖曾我」にて初シテ以降、静岡県掛川市、磐田市、島田市のほか都内各地近郊で能の普及に努めている。



能 藤 戸

前シテ(漁師の母) 長谷川晴彦
後シテ(漁師)

ワキ(佐々木盛綱) 安田 登
ワキツレ(從者) 高橋 正光
ア イ(從者) 大藏 教義
大鼓 亀井 洋佑
小鼓 幸 正昭
笛 成田 寛人

後見 八田 達弥
梅若 雅一

梅若 志長 遠田 修
中村 政裕 伊藤 嘉章
青木 健一 青木 一郎
古室 知也 梅若 泰志

狂言 岡 太 夫

(二時二十五分頃)

シテ(舞) 大藏彌太郎

アド(男) 大藏 基誠
アド(太郎冠者) 小梶 直人
アド(女) 大藏 章照

後見 大藏 康誠
備キ 高木 謙成

休憩二十分

能 融

(三時十分頃)

前シテ(尉) 加藤 眞悟
後シテ(融大臣)

ワキ(旅僧) 御厨 誠吾
ア イ(從者) 吉田 信海

大鼓 大倉栄太郎 大川 典良
小鼓 幸 信吾 栗林 祐輔

後見 梅若 泰志
中村 裕

萩原 郁也 遠田 修
梅若 紀佳 伊藤 嘉章
青木 健一 梅若 紀長
梅若 雅一 八田 達弥

(終了予定 四時四十分頃)

演目の見どころ…

能 藤戸 (ふじと)

源平の合戦に勝利した源氏方の武将、佐々木盛綱は、備前国児島にある藤戸の合戦(寿永三年/元暦元年:1184年)で、馬で海を渡る快挙を成し遂げ、先陣の功を挙げました。それにより、児島を領地に賜りました。春の吉日に、盛綱は初めて領地入りしました。すると一人の老婆が現れ、我が子を殺したと名指しで、盛綱を咎めます。初めは、知らぬ存ぜぬを通していた盛綱も、再三の老婆の追及とその哀れな様子に心を動かされ、とうとう告白します。源氏が戦陣を構えた藤戸は、平家の陣地と海で隔てられ、戦況は膠着していました。盛綱は地元に住む若い漁師から、馬で渡れる浅瀬ができる場所と日時を聞き出します。このことを、平家方はもちろん、味方にも知られなかった盛綱は、他言を恐れて漁師を殺し、海に沈めてしまったのです。この話を聞いた老婆は、半狂乱となり、自分も殺せと転げまわり、我が子を返せと盛綱に迫ります。盛綱は老婆をなだめ、漁師を回向することを約束し、家に帰らせました……。

狂言 岡太夫 (おかだゆう)

蟹入りにきた男(シテ)に舅は蕨餅を出し、これは岡太夫ともよばれ朗詠の詩にも詠まれていると教える。帰宅した男は妻に作らせようとするが、名を忘れたので詩をつぎつぎあげさせる。目指す名が出てこずいらだった男が妻に手を上げると、妻が「紫塵の懶き蕨人手を挙る」と吟じたのでやっと思い出す。

能 融 (とおるくつろぎ)

都に上った東国の僧が、六条河原院まで来たところ、ひとりの汐汲みの田子を背負った老人が現れます。六条河原で汐汲みとは、と訝る僧に、老人は、この河原院はかつて河原左大臣といわれた源融が、陸奥千賀の塩竈の景色をそのまま都に移して作って住んだところだと講れを語るうちに、月が出てあたりを照らし、趣深い秋の夕景色がふたりの眼前に広がります。

庭の景色を眺めつつ、僧と老人がなおも言葉を交わします。融は、毎日難波から潮を汲ませて、院の庭で塩を焼かせて一生の楽しみとしたが、後を継ぐ人もなく、この河原院は荒れ果ててしまった……。

近くに住む者から、河原院と融の大臣の物語を聞いた僧は、先ほどの老人が大臣の亡霊だったと思い当たり、眠りにつきます。すると在りし日の姿で融の亡霊が現れ、月光に照らされながら華麗な遊楽に乗って舞うのでした。融は、時を忘れたかのようにこの月夜に興じていましたが、夜明けとともに、名残惜しい面影を残して、再び月の都へ戻っていきました。